

あつた。然し議論が深くなればなる程二人の意見は衝突した。これは互ひに異なる性格の然らしめる所であつたが、その爲共に得る所は大きかつた。かうした二人の内にも全く共通した点、本屋を歩く事と地方の遺蹟を見物する事は、和尚様と私との交友の不可缺の要素であり二人が結ばれた端緒もこゝに所以するものかも知れない。二人は毎週一度位は共に本を求めて歩き廻つた。又互ひに打合せをしては各地の遺蹟を歩いた。日帰りの時もあり二、三日掛りの時もあった。埼玉群馬や神奈川静岡等、或る時は横穴古墳へ潜り込んだり、或る時は古社寺を見、又古い墓石を探したり、疲れを忘れて幾たびか、日の暮れた見知らぬ野道を彷徨つた事もあつた。

こうして共に汗を流して歩いた想ひ出はいまも鮮かに彷彿としてくる。卒業後も、時々私の家へ来て話を交へたが、多くは手紙で往來した。来る手紙毎に御無沙汰を謝すと書いてあつた。然し月に二三遍は必ずと云つてよい程送られて來た。時には續けて三通も來た事もあつた。その返事は私こそよく御無沙汰してしまつた。それらには色々な通信文と共に研究書の照會や本の注文などが書いてある事が度々あり、又難しい研究問題等を書いて意見を求められたりして、専門の異なる私は散々悩まされた事もあつた。旅先で多忙の毎日送つてゐる時にも常に學問向上の諸問題を考へてゐる和尚様には私も新たため驚かされてしまつた。私の受取つた最後の手紙にも「佛敎汎論二卷を求め置き下され」と書かれて居た。その手紙は非常な長文で四百字詰にしたら二十枚近い程あり小さな字できれいに清書されて居た。私はあんなに長い手紙を貰つたのは始めてであつた。又その手紙に「西乗寺の裏の貝塚より土器片を掘り出しました。持ち帰つて差上げますから御受取下さい」と書いてあつた。土器は

和尚様と共に海に沈み、やがて引き上げられて、私の手許へ届いた。碎けては了つたが有難い形見である。

先輩としての桑山さん

史學會委員 三木 太郎

「私の考えは玉村先生の御意見と違ふんです！」研究室では頭を丸めた小柄な一見平凡そうどこか飄逸とした先輩が熱辯をふるつていた。桑山さんだつた。その頃の不勉強の私には自分の意見を臆せず堂々と教師の前で述べるなど、まして異論を挟むというに至つては夢想だにもなしえなかつた。その後幾度か、先生方と膝を付合せて眞摯に談じている桑山さんの姿を教場や研究室において見うけた。孜々として弛まない研學の姿に、同じ歴史科の學生として自らの無力に恐懼した私は前途に不安を覚えたほどだつた。黯然とした日々を送つていた或る日、桑山さんが色々話しかけてくれた。學識をたかぶらない同等の者に話し合うように問題を呈示してくれる桑山さんに、しどろもどろの拙い意見を披陳したとき、その淺學を決して蔑視することなく熱心に耳を傾けてくれた。先輩というより良き友として接してくれた桑山さんに、いつか卑下した暗愚の心は消え去り、希望を持つて共に學べるようになった。親密の度は學問だけでなく、人と人との交わりに及び、甘えて先輩に對する禮を缺いたことも屢々あつたことであろう。桑山さんは無禮をとがめはしなかつた。良い方だつた。屹度今も、生涯學問に身をゆだねた桑山さんの事だから、幽冥境で眞摯に學べていられることだろう。安らかであれかしと冥福を祈りつゝ筆を擱く。

友去りし衆生濟度の慈悲とてか哀れにもにて愛カナしきものぞ